産経ニュース

2015.1.17 05:02

【主張】阪神大震災２０年　教訓生かし防災先進国に　自主、共助が復興早めた

「この度は違いました。真っ暗な闇の中で、大地の悪魔は、突然家を持ち上げたたきつけ、それでも気が済まず、両手で家を引き裂こうとしました。本気で殺しに来ている！　何故だ」

阪神大震災で亡くなった学生の葬儀で、恩師が読んだ弔辞の一節である。

20年前を思い出すと、決して大げさな表現ではない。

神戸の空を黒煙が覆った長田区の大火、数百メートルにわたって横倒しになった高架の阪神高速道路、いたるところでビルや民家が倒壊した。それは戦時中の空襲を体験した人々でなければ、見たことのない光景だった。

「この度は違いました」というのは、誰も予想していなかったからだ。SF作家の小松左京さんは、昭和40年代にベストセラーになった「日本沈没」を書くために歴史上の大地震や地殻変動を調べ尽くしたが、関西では文禄5（1596）年の伏見大地震が記録に残る程度で、阪神間をこのような直下型の大地震が襲うとは思ってもみなかった。

最大震度7。死者6434人、建物の全半壊24万9180棟、被害総額約10兆円。その時点で戦後最大の自然災害だった。

大きな犠牲の上の教訓を忘れてはならない。

«「官に頼まず」の精神で»

神戸の街を歩いた。倒壊したビルは建て替えられ、焼け跡は区画整理されて新しい建物が並ぶ。慰霊碑やモニュメントはあるが、外見上、震災の爪痕はもうない。

昨年11月、震災当時の兵庫県知事だった貝原俊民さんが不慮の交通事故で亡くなった。県庁への登庁に時間がかかり、地震発生から4時間もたっての自衛隊への派遣要請の遅れが、助かる命を救えなかったと非難された。長年、自衛隊を違憲としてきた社会党の委員長だった当時の村山富市首相も、同様の批判を浴びた。

災害時において、訓練された人員、装備を有する自衛隊ほど頼もしい存在はない。東日本大震災や昨年の御嶽山噴火などでのめざましい活動は記憶に新しい。阪神大震災以降、もはや自衛隊の出動をためらうことはありえない。

一方で、復興の先頭に立った貝原さんのリーダーシップには評価が高い。震災前に戻すのではなく、それを上回る新しいまちづくりをめざして「創造的復興」を掲げた。政府内には「焼け太りは認められない」との声もあったが、政府主導ではなく地元中心の復興を主張して押し切った。

被災地のニーズをくみ上げての復興計画には、各地にできた「まちづくり協議会」など住民組織が果たした役割も大きかった。「官に頼まず」は関西人の伝統的精神でもある。

まもなく4年を迎える東日本大震災は、福島第1原発の事故があり、災害の形態、広がりも大きく異なるが、復興のスピードは遅い。何より、被災地の未来像が見えにくい。阪神大震災を参考にすべきだ。

«記憶に畳を入れよう»

阪神大震災では、家屋に閉じ込められて助かった約16万4000人のうち、自力脱出が8割近い約12万9000人、家族や隣人、友人らに救出されたのが16・5%に当たる約2万7100人、消防、警察、自衛隊など公的機関による救出は5%未満の約7900人というデータがある。

時間との闘いという面もあるが、河田惠昭関西大教授によると、過去の大災害でもほぼ同じ傾向という。昨年11月の長野県北部の地震でも、近隣住民の助け合いによって死者が出なかった。

「自助」「共助」が防災の基本であることを心したい。

南海トラフ巨大地震は、東日本大震災を上回る被害が想定されている。常に備えを怠ってはならない。さらに、地震国であり、阪神大震災、東日本大震災を体験した日本は、防災先進国としての役割が期待される。

大阪市の木津川に架かる大正橋のたもとに、安政南海地震（1854年）の慰霊碑がある。石碑には津波によって多数の犠牲者を出した様子が細かに刻まれ、末尾にこう書かれている。

「願わくは心あらん人、年々文字よみ安きやう畳を入れたまふべし」

阪神大震災から20年は、あの体験を風化させないよう畳を入れるときだ。

©2015 The Sankei Shimbun & SANKEI DIGITAL All rights reserved.